

KBムック

名匠の卓越した技が盆栽を創る

匠の技

盆栽技術集





赤松 樹高155cm左右193cm 作業前正

庭木サイズの巨大赤松 盆栽樹形に導くための幹枝操作

実 技／漆畑大雅（静岡県静岡市 苔聖園）

作業日／8月10日

葉張りが2mに近いサイズ モンスター級の巨大赤松が出現！

この赤松は四国に住む愛好家の元で長く培養されていた樹であったという。鉢には入っているが、樹高は150cmを超えており、葉張りも2m近い大きさ。盆栽に寸法の基準はないものの、展示会出品を目標とした場合、あまりにも大きなサイズの樹は飾ることができず、敬遠される傾向があるのも事実。一律に述べることはできないが、できれば1m前後の大きさと樹姿をまとめるのが理想である。

荒れた幹肌が放つ時代感や古色、オーラは凄まじいものがあり、寸法なりに単調な部分や枝の間伸びは多少は見られるものの、地植えすることなく鉢で長年培養されていた素材。盆栽として致命的とも言える問題点は見受けられない。素材を前にした漆畑大雅氏は、盆栽としての輪郭を創出すべく樹形や正面の検討から入った。

旧正面の立ち上がり。



正面の検討 幹模様を優先した正面に変更



新正面の立ち上がり。迫力あるサバ幹を見せつつ、大きく曲がる幹模様の個性を活かせる位置を正面とするのが漆畑氏の構想。



漆畑氏が示した正面候補は時計回転に45度ほど回した位置。幹模様を優先した面だが、正面側に来る枝で幹が見えない。



植え付け角度変更後・新正面。左掲の正面候補だと樹冠部が大きく後方に倒れることになるので、植え付けが手前に起こされた。

これまでは足元にあるサバ（シャリ）幹を見所として正面が決められていたが、漆畑氏は幹模様に着目。旧正面から時計回転に45度ほど振った位置で、サバ幹を左に残しつつ幹が大きくうねるように伸び上がる場所を新正面に設定した。ただこの位置を正面にすると、旧正面で左枝として作られていた枝が前方に来て、せっかくの幹模様も見えない状態となる。この正面とするなら大幅な枝操作が必要となりそうだ。



新正面の左側面・作業前。幹が後方に流れているため、樹冠部が後ろに反って見える。



左側面・角度変更後。植え付けを正面側に倒したので樹冠部の位置が重心の位置に戻った。

太幹を凝縮して樹冠の位置を引き下げる

正面変更で前に回ってきた枝の処理をする前に、漆畑氏は巨大な樹体を縮小するための準備に取りかかった。樹冠部の位置が決まらなると樹全体の輪郭が見えず、枝の長さなどが判断しづらいのが理由。まずは上部で屈曲する幹模様を利用して幹を畳み込み、樹冠部全体を引き下げる作業が行なわれた。



①第一段階の幹曲げ予定位置。この屈曲を利用し、ジャッキで曲がりを引き絞って縮小する。



②鉄筋を樹に固定し、鉄筋と太幹をつないで幹が引き絞られた。



10cm近くある太幹なので手作業で曲げるのは不可能。ジャッキを使ってゆっくりと引き絞り、幹が曲げられていく。



③第一段階の幹曲げを終え（下部のゴム片の位置）、その上の曲を利用して幹を曲げるためにジャッキをセット。



④先ほどと同じ要領で、ジャッキを使って枝が引き下げられた。もう少し引き下げるのが理想だが無理は禁物。時間をかけて再度絞り込む。

幹の畳み込みによる樹冠位置の変化



作業前・新正面



第一段階の幹曲げ後。上部の枝がわずかに右側に移動した。



第二段階の幹曲げ後。上部の枝群が大きく下方方向に移動し、左側の枝が持ち上がったことでしっかりと空間ができた。

樹高縮小と左枝群の空間を埋める枝操作

樹冠を構成していた枝群を一旦大きく右方向に引き寄せてから下方方向に落とし込んだため、樹冠部左側にあった枝群が上方に伸び上がるような状態となり、樹冠部左側には大きな空間が生じてしまった。漆畑氏は持ち上がった左枝群をこの空間に収めるように、枝元から引き下げた。先ほどの幹曲げと比べて枝は細いとは言え、過度に力を加えると粘りなく折れてしまうことも多い赤松である。支えの木片を当てながらの慎重な作業となった。



幹曲げで大きく持ち上がってしまった樹冠部左側の枝。



左枝群引き下げ後

木片を使った枝折れ対策

樹冠部の粗がけ終了・正面より



①幹曲げと同じ要領で針金による引っ張り力で枝を引き下げる。針金が当たる部位はゴム片で保護。



②上から押さえ込むようにして枝元から下げる漆畑氏。お弟子さんがゆるんだ針金を引き絞って固定する。



③もう少し枝先を下げたいが枝元に割れが生じて危険と判断した漆畑氏は、途中で木片を挟んだ。



④木片を挟んで負担がかかる支点を避らすことで、同じように押し下げた枝元に余計な力をかけることなく枝元が下げられた。

幹の前に重なった枝を移動させる

樹冠部の位置がおおよそ決まったところで、まだ手つかずだった下枝群の整理と新金かけに取り掛かった。最も問題となるのは樹の正面側にあり、幹を遮るように伸びている長い枝である。漆畑氏はこの枝を左に移動して左一の枝とする構想を立てていた。これまでの太幹に比べて主枝は細く、移動は容易にも感じるが、こういった古枝ほど予兆なく折れるのが最大の難しさ。模様木樹形のポイントとなる大切な枝なので、枝折れ対策として先元からラフィアを巻いて枝の移動が始まった。



樹冠部引き下げ後・正面（再掲）



幹を遮るように右方向に流れる枝（写真中央の枝）。枝元から枝岐れまでの距離が長く、変化にも乏しい。抜いてしまえば楽なのだが左一の枝がないので、この枝を左に移動させて一の枝とする構想が立てられた。



この枝が折れると樹形構想を根本から変えるといけな。慎重を期して枝折れ防止にラフィアが巻かれてからの作業となった。



樹が太いので針金が細く見えるが、6番線の2本巻きで枝の移動と固定を試みている。左手で枝元をしっかりと固定しながら渾身の力が込められた。



幹を横切るように伸びていた枝だったが、幹の流れに添うように方向が修正され、左一の枝として見えそうな角度・場所に移動できた。枝元の間伸びは気になるが、他の枝を寄せて隠すことで修正はできるだろう。

左側面より一の枝の変化を見る



作業前。旧正面側ということもあり、左側面には使える枝がほとんどない。



前枝移動後。正面側にあった枝が左側に移動し、左一の枝候補ができた。



左一の枝・粗がけ後。長く伸びた枝の先端を持ち上げるように枝骨を修正。一の枝のボリュームとしては十分だが、やや長いか。

左下枝移動・粗がけ後、正面より。隠れていた幹模様がよく見えてきた。



間伸びしていた左一の枝の立て替え



左下枝移動・粗がけ後（再掲）



幹を隠していた樹冠部下の前枝を切除。さらに長かった左一の枝の先端も追い込まれた。



下枝群整姿後・正面より
左右の葉張りや重なりを考慮しながら枝棚がまとめられていく。ようやく模様木らしい輪郭が見えてきた。

赤松特有の「ポッキリ折れ」を起こすことなく、枝元から曲げて左枝を一つの枝として理想的な位置に移動させることに成功。この枝をどの程度の輪郭でまとめるかが次の焦点となった。

針金がかかっていない状態では長大に感じるが、先端を持ち上げて細かく棚割りすると、差し枝として模様木の輪郭内に納めることはできるという。しかし枝の単調さはやはり気になるところである。枝の中間部付近の枝岐れまで切り戻すと自然な模様が生まれて単調さは回避できそうだが、最終の仕上がりは左枝群がやや弱く感じられるかもしれない。それでも樹の将来性を優先して単調さを解消すべく、左一の枝は途中で切り替えられることになった。



左枝を途中の枝岐れで立て替える漆畑氏。

樹冠部の剪定・整姿



樹冠部作業前・正面より



樹冠部を構成していた枝芯をわずかが左方向に戻して、若干の樹高縮小が図られた。



樹冠部整姿後・正面より



枝（樹芯）の割れをお弟子さんに確認させながらゆっくりとジャッキを引き絞る。



作業終了 樹高120cm左右160cm (鉢合成)

新全整姿を経て、立ち上がりや幹の太味に対して
葉の位置、葉張り等のバランスが良くなり、風格
と気品を漂わせる姿にまとめられたのではないだろ
うか。幹のたたみ込みによって約35cmの縮小を叶え
てはいるが、樹高は未だ120cmある。盆栽という概念
からすると大きすぎるくらいはあるが、全体のバラ
ンスが良くなったので、写真からではそれほどの大
きさは感じられない。ただ大きいだけのゴテ木では
ないことが分かる。盆樹としてのバランスを考えると、
この寸法にならざるを得なかったというところであ
らう。

「展示会出品を考えると、樹高や葉張りをもっと縮小
しなければならいでしょうね。枝の絞り込みだけ
ではなく芽接ぎによる立て替えなど、輪郭を小さく
する方法はいくつか考えられます。でも今それをや
るべきかは疑問が残りますね。この樹が備えている
幹肌の迫力などの魅力は、現状でも十分に引き出せ
たのではないのでしょうか。この大きさを維持するか、
さらに縮小するかは、これから樹と相談しながらじ
っくりと考えていきます。」と、仕上がりを前にして
漆畑氏は語った。